財団法人山武郡市文化財センター発掘調査報告書第58集

上滝ノ下遺跡

1999

千葉県横芝町

財団法人　山武郡市文化財センター

上滝ノ下遺跡
（かみたきのした）

序　文

九十九里平野部の北東側に位置する横芝町は、太平洋に注ぐ栗山川と木戸川の両河川に挟まれた、台地及び平野部からなります。この地域は緑豊かな台地と海に接していることから縄文時代以来数多くの遺跡が知られています。特に栗山川の一つの支流、高谷川流域には縄文時代の独木舟が多数発見されております。また、貝塚では山武姥山貝塚が全国的にも有名な遺跡で、九十九里地方では特に屈指の貝塚であります。

横芝町では、木戸台地区に整備の一環として汚水処理建設事業が計画され、平成９年度に確認調査を実施し、古代の水田らしき跡が確認されました。本年度はこの範囲の本調査を実施しました。その結果、先人達が農耕具を使用した耕作跡が確認されました。さらに、縄文時代の流木も多数発見され、縄文時代の高谷川の氾濫の凄さを知らされました。

このほど上滝ノ下遺跡として発掘調査の成果がまとまり、報告書として刊行する運びとなりましたが、その詳細は本文中の通りであります。この地域の歴史の手掛かりとして、また学術資料はもとより、広く一般に普及されることを願ってやみません。

最後にあたり、今回の調査に掛かり多大なる御協力をいただいた横芝町都市整備課、終始御指導いただいた千葉県教育庁生涯学習部文化課をはじめ、関係諸機関並びに関係各位に心から御礼申しあげます。

平成11年３月

財団法人山武郡市文化財センター

理事長　　小倉　幸

凡　例

1．本書は、横芝町による汚水処理施設建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本書に所収する内容は、千葉県山武郡横芝町木戸台字上滝ノ下1166-1他に所在する発掘調査の成果である。

3．現地調査は、横芝町の委託を受けて千葉県教育庁生涯学習部文化課及び横芝町教育委員会の指導のもと、下記のとおり実施した。

確認調査　平成9年10月27日～同年10月31日　面積　1,882.61m²/188m²　木川浩司

本調査　　平成10年8月17日～同年10月7日　面積　　700m²　平山誠一

4．整理作業及び報告書作成は、調査課長　大野康男の指導のもと副主査　平山誠一が担当した。石器は吉田直哉に協力を得た。

5．本書の執筆は石器と古墳時代以降は平山が、縄文時代の土器を大野が行った。

6．本書の編集は平山が行った。

7．調査で使用した遺跡番号は当センター独自のコード番号を使用し、『山・文・セ-131』である。

8．出土遺物、図面、写真等の記録類は、財団法人山武郡市文化財センターが保管している。

9．本書の第1図に使用した地形図は、国土地理院発行の2万5千分の1・多古及び成東である。

10．本書の第2図の地形図は迅速図『八日市場村及び芝山村・2万分の1』を改図及び再トレースし、4万分の1で掲載した。

11．木製品は、大谷弘幸氏にご指導を賜った。

12．発掘調査から報告書刊行に至るまで、下記の諸機関・方々にご指導とご協力を頂いた。

千葉県教育庁生涯学習部文化課、横芝町教育委員会、横芝町都市整備課、宮内勝巳氏、加藤正信氏

用　例

1．本文中の遺構名は、ローマ字の略号を用い、下記のとおり記号化した。

溝－M　　ピット－P

2．挿図縮尺は基本的に全挿図に縮尺を図示し、下記のとおりとした。

遺構　1／200

遺物　縄文土器片　1／3　土師器・須恵器・陶器・木製品・その他　1／4

　　礫・石器　　1／3　種子　1／1

3．土器実測のうち、赤色塗彩のある遺物は器面にN O.111スクリーントーンで示し、須恵器・灰釉陶器は断面に黒塗りし、施釉はNO.687、緑釉はNO.52、黒色処理はN O.1211のスクリーントーンでそれぞれ示した。

本文目次

序　文
凡　例
用　例

第１章　序　説 …… 1
　第１節　調査に至る経緯と経過 …… 1
　第２節　遺跡の位置と環境 …… 1
　第３節　調査方法 …… 4
　第４節　基本層位 …… 4

第２章　検出した遺構と遺物 …… 6
　第１節　遺　構 …… 6
　第２節　遺　物 …… 8

第３章　まとめ …… 17

挿図目次

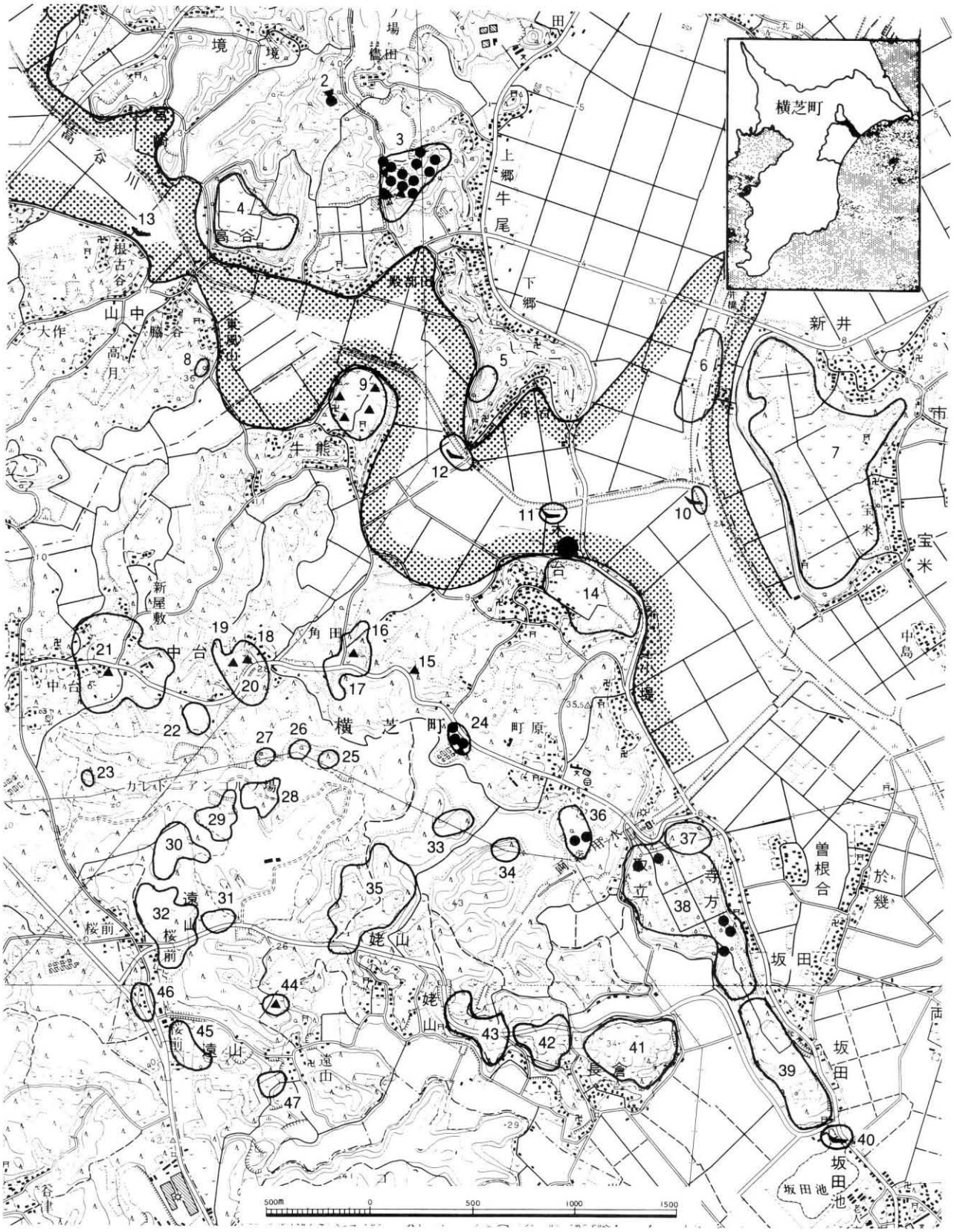
第１図　上滝ノ下遺跡及び周辺の遺跡
第２図　遺跡地及び周辺の迅速図
第３図　上滝ノ下遺跡及び周辺の地形
第４図　確認トレンチ及び遺構配置図
第５図　排水溝及びグリッド
第６図　遺構平面図及び断面図
第７図　流木平面図
第８図　出土遺物（１）
第９図　出土遺物（２）
第10図　縄文土器（１）
第11図　縄文土器（２）
第12図　出土礫石器
第13図　種子（流木－３）

表目次

第１表　遺物観察表
第２表　石器属性表

図版目次

図版１　１．遠景　高谷川から望む
　　２．調査区全景
　　３．調査風景
図版２　１．耕作跡断面　３トレンチ
　　２．耕作跡断面　７トレンチ
　　３．地山整形跡
図版３　１．溝（Ｍ－001）
　　２．流木－１
　　３．ＮＯ．76出土状況
　　（内側植物繊維）
図版４　出土遺物（１）
図版５　出土遺物（２）



第１図　上滝ノ下遺跡及び周辺の遺跡

第1章 序　　説

第1節　調査に至る経緯と経過

上滝ノ下遺跡は、横芝町が都市整備事業の一環として木戸台地区に汚水処理施設の建設が計画され、都市整備課から教育委員会を経て候補地の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会が平成9年6月18日付で提出された。これを受け、千葉県教育庁生涯学習部文化課及び横芝町教育委員会により現地踏査を実施した。この候補地は高谷川低地遺跡として既に周知されている場所の範囲のため、その旨を平成9年8月18日付で回答された。その後、遺跡の取扱いについて千葉県教育庁生涯学習部文化課及び横芝町教育委員会、横芝町都市整備課の三者の間で協議を重ね、現状での保存が困難な範囲について記録保存の措置を講ずることとなった。調査は財団法人山武郡市文化財センターが受託し発掘調査を実施した。

調査は、確認調査を平成9年10月27日から平成9年10月31日まで実施した。その結果、奈良・平安時代の水田跡が確認され、本調査を平成10年8月17日から平成10年10月7日まで実施した。

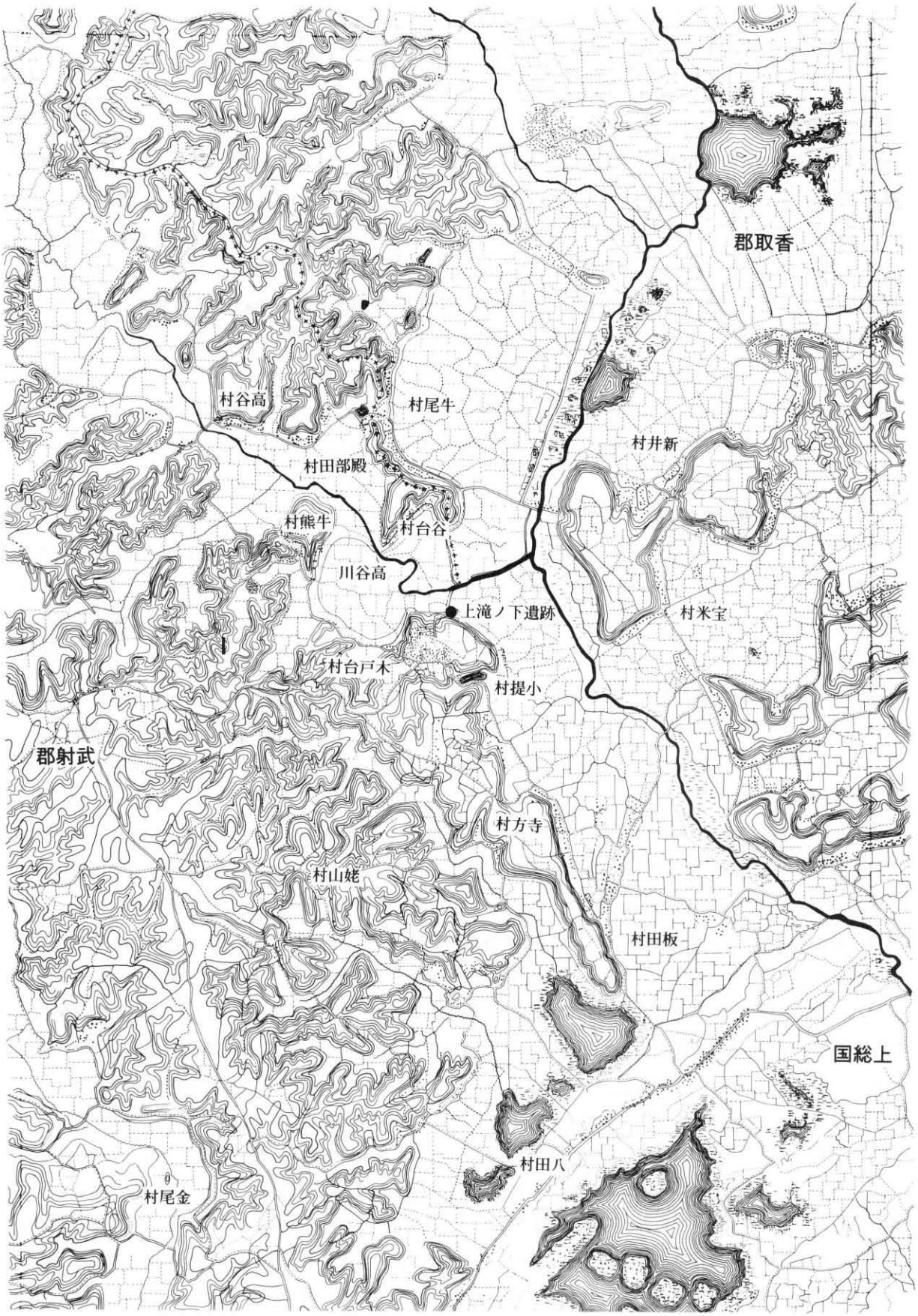
第2節　遺跡の位置と環境（第1・2図）

上滝ノ下遺跡が所在する横芝町は、千葉県の北東部、下総台地の東南部と九十九里平野部の中央部からやや北側に位置する。町域は北西から東南にかけて細長く、北側の町境を栗山川が台地から平野部を経て太平洋に流出している。この平野部は沖積世になってから形成されたもので、縄文海進及び海退の隆起運動の結果、十数列の砂州が形成されている。

上滝ノ下遺跡は、栗山川の中流域、高谷川の開口部付近、右岸の坂田支台北側裾部に位置する。標高は約6.5～7.5mで、河川沿いの水田面から約3mほどの段丘上で現況は畑地である。この遺跡周辺は高谷川低地遺跡として既に著名な遺跡範囲に含まれ、漆塗竹製櫛が発見された所で縄文時代後・晩期の遺跡である。特に独木舟が多数出土している。

以下、主な遺跡について概観すると、本遺跡の北側高谷川流域には独木舟が多数発見されているが高谷川の本流である栗山川との合流点付近には於幾大縄場遺跡（10）が所在する。この遺跡での独木舟は舟底が平坦に削り出され、いわゆる縄文期の典型的な丸底の独木舟とは形態的に相違が見られ、古墳時代の所産と考えられている。本遺跡の北側、直線にして約200mほどには木戸台低地遺跡（11）が、そこから上流には高谷山遺跡（12）、芝山町高谷川低地遺跡（13）がそれぞれ所在し、縄文時代後・晩期の土器も多数出土する。また、第2図の迅速図を見ると本遺跡周辺の河川はかなり蛇行していたことが確認されるが、恐らく当時は大雨による河川の氾濫頻度の高さが想起される。この高谷川は土地改良事業により昭和32年に河川改修が着工され、現在は第1図のように変貌している。

町内の貝塚では、縄文時代中期から晩期までの山武姥山貝塚（44）が著名である。慶応義塾大学の5回の調査及び千葉県文化財センター（平成元年調査）が調査しており、それらの成果から縄文時代前期から晩期にわたる遺跡であることが判明している。出土遺物は縄文時代中期の阿玉台式・加曽利E式、後期の堀之内式・安行式、晩期等の土器が見られ、獣骨や魚骨、石剣、石皿、貝類ではチョウセンハマグリやダンペイキサゴ等の海水主体のものやこれに対して魚骨はウナギ・フナ属の淡水性が主体で特徴的でもある。他には高谷川に面した地点にも縄文時代中期から後期にかけての木戸台第1・第2貝塚（15・16）や角田貝塚（18）、鴻巣貝塚（19）、中台A貝塚（21）等が点在する。さらに、高谷川にせり出した台地上では地点貝塚を伴った牛熊遺跡（9）が所在している。この遺跡では昭和29年に調査が行われ、縄文中期の加曽利B式、安行Ⅰ・Ⅱ式や姥山Ⅱ式の土器、土偶、骨針、ハ



第２図　遺跡及び周辺の迅速図　（１：40,000・改図再トレース）

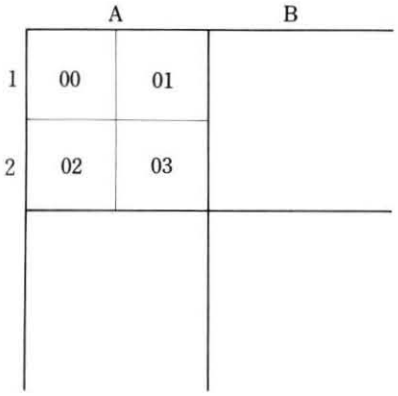
第3図　上滝ノ下遺跡及び周辺の地形

マグリ等が出土している。

縄文時代以降の遺跡では、高谷川の左岸台地上には芝山町殿部田古墳（3）が所在する。この古墳群は昭和48年に芝山はにわ博物館により調査が行われ、前方後円墳４基、円墳13基が確認されている。また、前方後円墳には埴輪が出土し、円筒埴輪、人物や動物の形象埴輪等が発見された。この他高谷川流域の台地上には、包蔵地が多数確認され、この地域の遺跡を形成した原始・古代の人々が水路をいかに有効利用し、集落を営んでいたか様相が窺える。

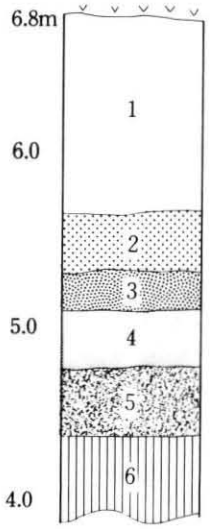
１．上滝ノ下遺跡　２．侭田台古墳（芝山町）３．殿部田古墳群（芝山町）４．折戸遺跡（芝山町）　５．谷台遺跡　６．郷分遺跡（多古町）　７．宝米遺跡（光町）　８．東風山横穴群（芝山町）　９．牛熊遺跡　10．於幾大縄場遺跡　11．木戸台低地遺跡　12．高谷山遺跡　13．高谷川低地遺跡　14．上宮台遺跡　15．木戸台第１貝塚　16．木戸台第２貝塚　17．木戸台遺跡　18．角田貝塚　19．鴻巣貝塚　20．角田遺跡　21．中台Ａ遺跡　22．中台Ｂ遺跡　23．中台Ｃ遺跡　24．町原古墳群　25．東長山野Ⅰ遺跡　26．東長山野Ⅱ遺跡　27．東長山野Ⅲ遺跡　28．東長山野Ⅳ遺跡　29．東長山野Ⅴ遺跡　30．西長山野遺跡　31．南長山野遺跡　32．上仁羅台遺跡　33．野中台遺跡　34．中洞遺跡　35．大山遺跡　36．広台古墳群 37．振子上遺跡　38．寺方古墳群　39．坂田城跡　40．坂田池遺跡　41．荒久台遺跡　42．長倉遺跡　43．長倉宮脇遺跡　44．山武姥山貝塚　45．天ノ作遺跡　46．桜前遺跡　47．子ノ神遺跡

第３節　調査方法（第５図）



調査は、公共座標に沿ってｘ軸・ｙ軸を基準に10ｍ間隔で区切り大グリッドとし、その大グリッドを５ｍ×５ｍの小グリッドに４分割した。Ｘ軸は北から南へ１・２・・５まで、Ｙ軸は西から東へＡ・Ｂ・Ｄまでとし、調査範囲に２Ｂ－00から５Ｄ－00まで呼称した。調査は重機により表土から古代の水田面と思われる深さまで、慎重に除去し、遺構確認を実施した。また、調査区は水が湧き出るため、調査区の範囲に水切り用の排水溝を設けた。遺構から出土した遺物は、原則として覆土中位から上位のものは一括で取り上げ、覆土下位から底面までの遺物は番号を付した。

第４節　基本層位



層位は６層まで確認したが、４層から水が湧き出る。

第１層　客　土

第２層　暗青灰褐色泥炭層　　近世から現代の水田層

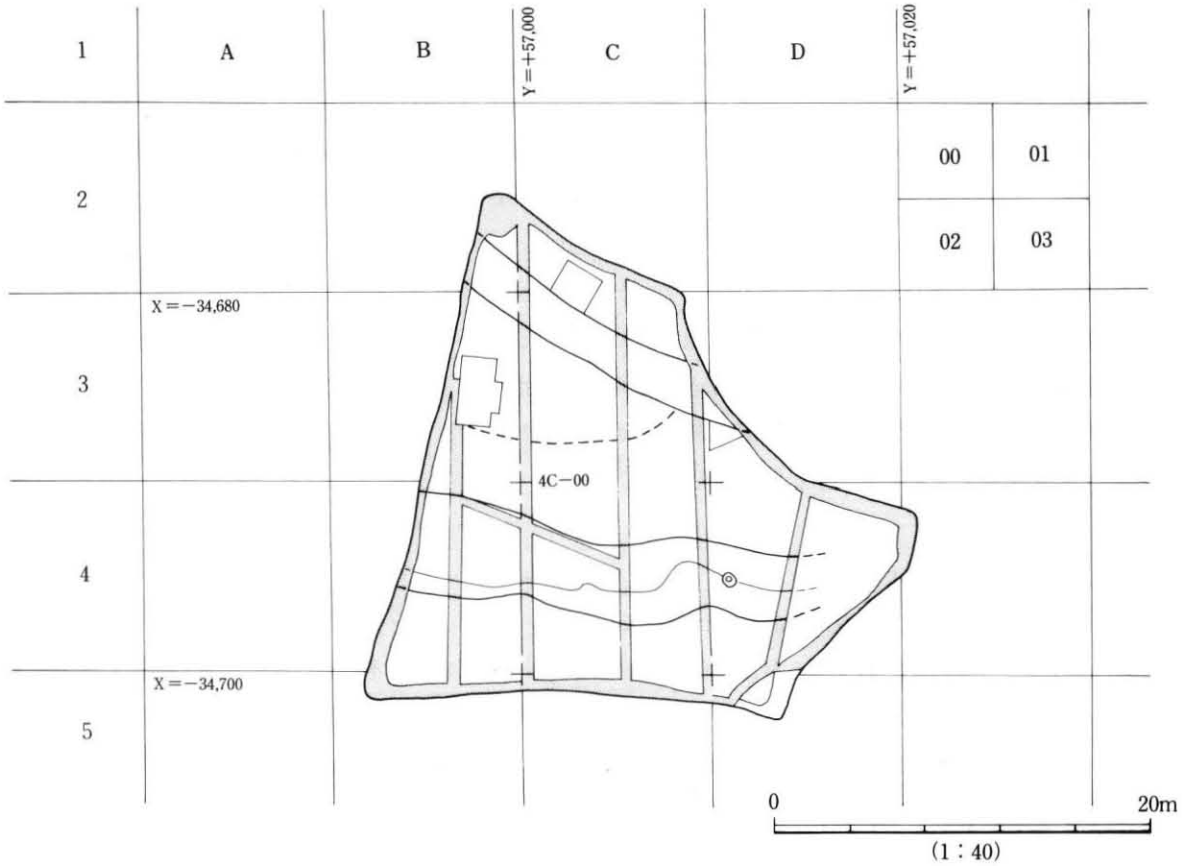
第３層　青灰褐色泥炭層　　中世から近世にかけての水田層か

第４層　暗灰褐色で泥炭層　　古墳時代から平安時代の層
ここから10cmほど掘り下げると
水田面らしき耕作跡を確認する。

第５層　黒褐色泥炭層　　縄文時代前期から晩期までの層

第６層　砂　層

第4図　確認トレンチ及び遺構配置図



第5図　排水溝及びグリッド

第2章　検出した遺構と遺物

第1節　遺　構

検出した遺構は、水田と思われる耕作跡1ヶ所、溝1条、地山整形跡及び河川氾濫跡である。特に地山整形跡からは耕作跡確認面から出土する遺物とほぼ同時期であることから、地山整形跡は恐らく耕作跡を形成する段階の遺構として捉えた。また、耕作跡の下層には縄文時代の包含層（縄文前期～晩期）が確認され、流木も多数検出された。これらの流木は恐らく高谷川が大雨により幾度となく氾濫した結果と考えられるため、縄文期の氾濫跡として捉えた。

耕作跡（第6図　図版2）

本跡は調査区の北西側に確認された。範囲は東西11.7ｍ、南北11.3ｍで、大畦畔や小畦畔などの畦や坪境線に相当するものは確認されなかった。しかし、断面から観察すると起伏に富んだ層が見られ、明らかに人為的に農耕具による耕作跡が看取された。この耕作跡の土質は青灰色または灰色の泥炭を呈し、グライ化していた。特に起伏がある層は青灰色に近似した色調で、若干植物繊維を含む。なお、稲の株らしきものは確認されなかった。出土遺物は確認面から8Ｃ代から9Ｃ代までの土師器や須恵器を確認したが、農耕具的な木製品は検出されなかった。

地山整形跡（第6図　図版2）

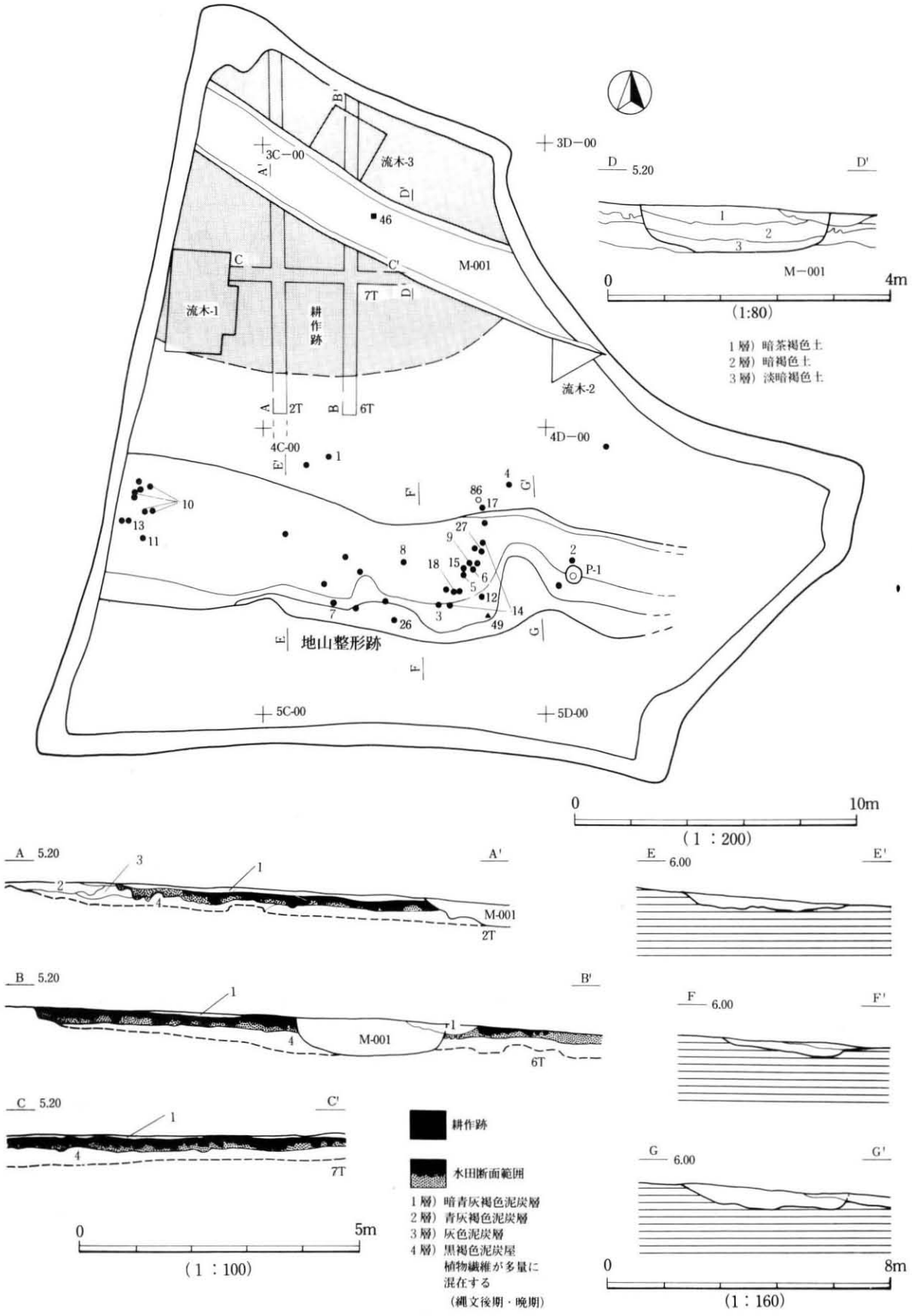
地山整形跡は調査区南側、東西方向に延びている。プランは若干蛇行はしているがおおよそ耕作跡を意識した配置とも読みとれる。確認した全長は約20ｍ、幅3ｍ～5ｍ程で傾斜に沿って削平をしている。覆土は上面で暗青褐色泥炭層で中世から近世頃の泥炭層が堆積しており、この期には既に地山整形跡は埋没していたことになる。また、ピット（Ｐ－1）を検出した。規模は径55cm、底面径23cm、深さ26cmである。覆土中位から下位では暗褐色土が主体になる層で、7Ｃ代から10Ｃ代までの土師器、須恵器、灰釉陶器椀、瓦片などが出土した。

溝（第6図　図版3）

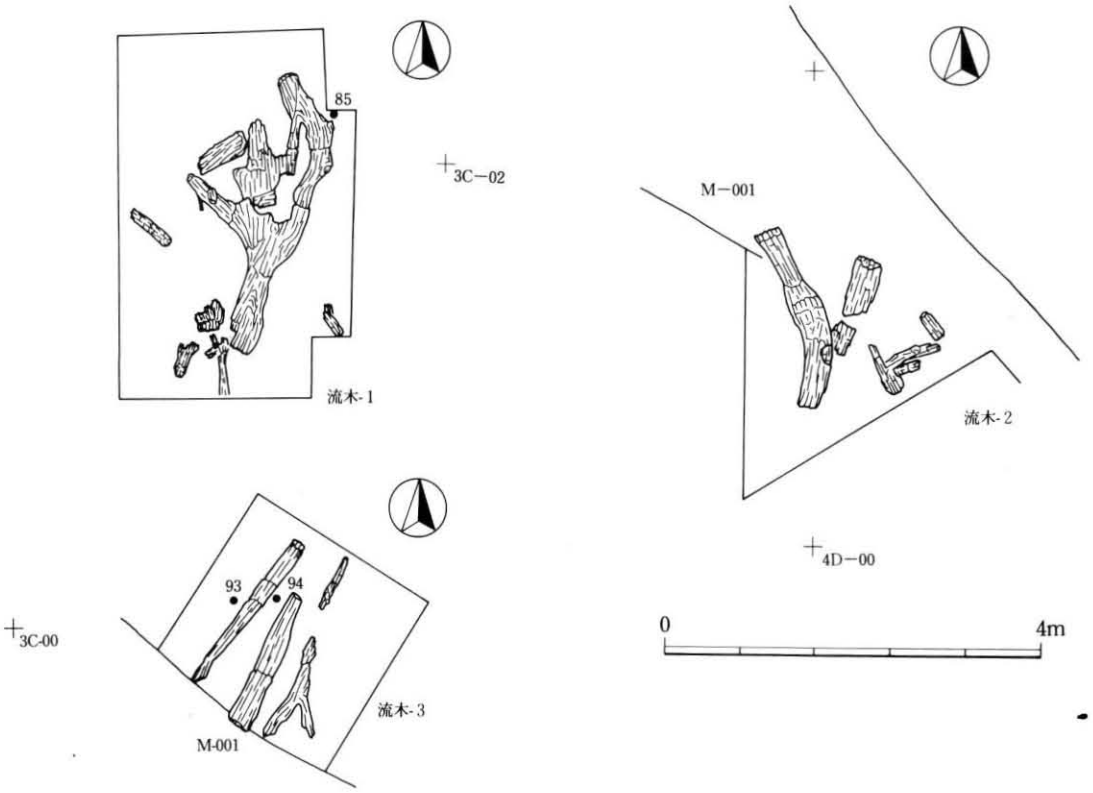
溝（Ｍ－001）は耕作跡のほぼ中央部を東西方向に横断したように確認された。規模は全長14ｍ、幅2.5ｍ前後で深さ0.55～0.65ｍである。断面はＵ字形を呈するが底面は比較的に平坦な面である。覆土は3層に分層される。出土遺物は中央部から木製の内外面黒漆を施した椀（46）を出土した。この椀は回転を利用した成形のもので、轆轤による削りだしたものと思われ、近世頃の所産である。

河川氾濫跡（第7図　図版3）

河川氾濫の範囲については今回の調査では掴めていないが、サブトレンチにより流木を多数確認した。流木－1から流木－3までの3ヶ所で見られ、針葉樹林や雑木である。また、流木－3には種子が2点出土した。（93）は恐らくももの種と思われるが（94）ははっきりしない。今回は時間的な制約があるため分析は実施していない。また6トレンチのＭ－001と重複する南壁付近の縄文包含層からは浅鉢（76）が出土した。この内側には植物繊維が密着していた。この繊維は円心力により巻かれた状態になり、浅鉢の内面の形である椀状を呈する。偶然的に植物が浅鉢に張り付き密着したものと考えられる。



第６図　遺構平面図及び断面図



第7図　流木平面図

第2節　遺　物

出土した遺物は総数3,015点を数える。その内訳は礫石器78点、縄文土器90点、土師器2,639点、須恵器186点、灰釉陶器7点、緑釉陶器2点、中世陶器1点、瓦3点、スラグ7点、種子2点である。これらはそのほとんどが破片であるが、遺跡の性格上、極力図化できるものはここに掲載した。

出土遺物（第8・9図　図版4）

1～50までは古墳時代以降の遺物であり、そのほとんどが破片である。

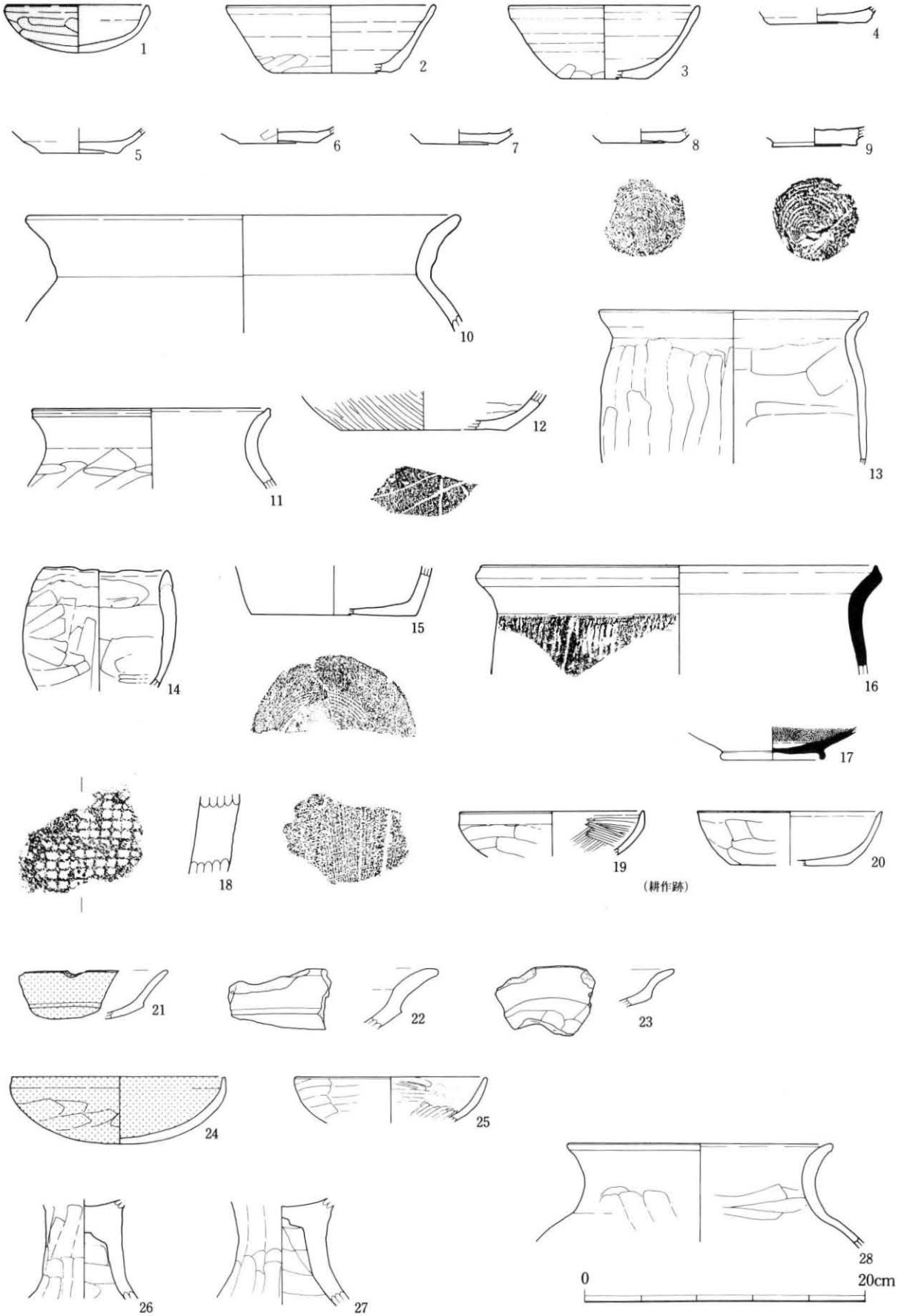
1～18までは地山整形跡からの出土である。

1～9は土師器坏で、1は未ロクロ段階の坏で、内外面には黒色処理（漆仕上げ）が施されている。他はロクロ成形である。また、4～9は底部片のみであるが底部はすべて回転糸切りである。2・3・6は体部下端に手持ちヘラ削りが見られる。

10～15は土師器甕である。12は胴部下位の遺存であるが磨きが見られ、胎土の雲母が多量に含む。常総甕である。底部には木葉痕が見られる。14は小形の甕で、口縁部付近では紐積痕が残る。15はロクロ成形の甕であり、底部は回転糸切りである。16は須恵器甕である。胴部には平行叩き目が施される。17は灰釉陶器椀で内面ハケヌリを施す。黒笹－90号窯式と思われる。18は瓦片で格子の叩き目が施されている。内面を見ると成形は桶巻き作りである。

19・20は耕作跡確認面からの出土である。

19は未ロクロ段階の坏である。体部は外面横方向のヘラ削りが見られ、内面には比較的に丁寧なヘラ磨きが施される。20はロクロ成形で体部外面には横方向のヘラ削りが見られる。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
(耕作跡)
20
21
22
23
24
25
26
27
28
0
20cm

第８図　出土遺物（１）

21～42までは地山整形跡の上位面及びグリッド一括の遺物である。

21～23は高坏の坏部片である。21は外面に赤彩が施され、内面は磨き及び黒色処理されている。22・23の坏部にも内面に黒色処理されている。24・25は土師器坏である。24は未ロクロ段階の坏で、25はロクロ成形の坏である。24は外面横方向のヘラ削りされ、内外面赤彩されている。25は外面横方向のヘラ削りが見られ、内面は比較的に丁寧なヘラ磨きが施されている。26・27は土師器高坏の脚部で外面縦方向のヘラ削り、内面横方向のヘラ削りが見られる。28～32は土師器甕である。28は頸部が弧状を呈し、横ナデが見られる。29は底部に木葉痕が見られる。30～32は口縁部がコ状を呈し、30は口唇部がつまみ上げている。30・31は胴部は縦方向のヘラ削りが見られる。33は須恵器甑で胴部は横方向のヘラ削りが見られる。34は須恵器甕である。35・36は土師器坏で底部を欠損するが、口径の1/2以下の底径と思われる。37は高台付椀である。内面はヘラ磨き後黒色処理（漆）されている。底部は回転糸切り後貼付高台である。38・39は須恵器で、38は坏で底部は回転糸切り離しである。39は高台付盤で、高台部を欠損する。40・41は灰釉陶器椀である。40は内外面に釉がハケヌリされ、高台部は台形状に近似する。41は内面に釉がハケヌリされ、高台部は三日月高台である。42は緑釉陶器片で胎土から見て東海産であろう。

43～46までは溝から出土した遺物である。

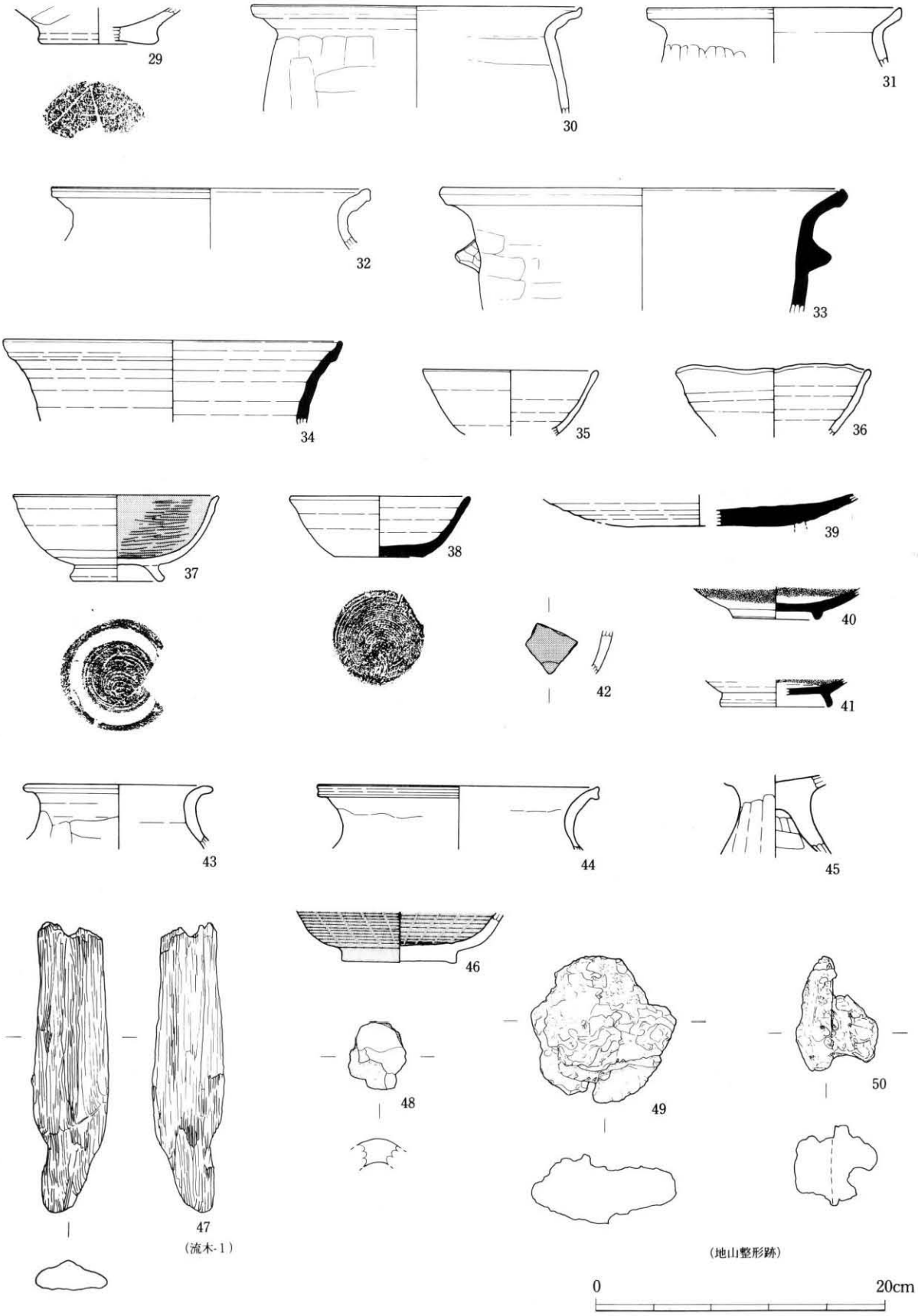
43・44は土師器甕で43は口縁部が強く外反する。44は頸部に紐積痕が残る。45は土師器高坏の脚部で外面縦方向のヘラ削り、内面縦方向のヘラ削り後横方向のヘラ削りが見られる。46は木製の椀である。内外面に黒漆が施されるが、底部外面は無彩である。内外面とも轆轤により削りだされ、轆轤目が顕著である。

47は流木－1から出土した木製の未製品である。先が細くなっている部分には焼かれた痕跡があり、炭化している。断面で見るかぎりでは山形状を呈しているので何らかの用途で使用され、その後廃棄されたものであろうか。

48～50は製鉄関係の遺物である。48は羽口鞴の破片である。直接的な熱の影響であろうか灰色を呈する。49は鉄滓である。椀状を呈し、いわゆる炉底部に検出される椀型滓である。50は炉壁である。鉄滓が付着している。

第1表　遺物観察表　　（　）推定・〈　〉現存　単位cm・g

遺　構	番号	器　種	遺存度	口　径	器　高	底　径	最大径	胎　土	色　調	備　考
地山整形跡	1	土師器坏	2/3	(10.2)	3.4			赤色粒	薄褐色	漆仕上げ
	2	土師器坏	1/4	(15.0)	4.8	(8.4)		白色粒	橙褐色	
	3	土師器坏	1/4	(13.6)	5.2	6.2		石　英	褐　色	
	4	土師器坏	底　部		〈1.15〉	6.8		白色粒	褐　色	回転糸切り
	5	土師器坏	底　部		〈1.8〉	5.5		白色粒	橙褐色	回転糸切り
	6	土師器坏	底　部		〈1.1〉	5.5		白色粒	橙褐色	回転糸切り
	7	土師器坏	底　部		〈1.1〉	5.4		石　英	黒褐色	
	8	土師器坏	底　部		〈1.0〉	5.6		白色粒	褐　色	回転糸切り
	9	土師器坏	底　部		〈1.1〉	6.0		雲　母	橙褐色	回転糸切り
	10	土師器甕	口縁1/3	(30.4)	〈8.2〉			赤色粒	赤褐色	


29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
（流木-１）
48
49
50
（地山整形跡）
0
20cm

第９図　出土遺物（2）

遺　構	番号	器　種	遺存度	口　径	器　高	底　径	最大径	胎　土	色　調	備　考
地山整形跡	11	土師器甕	口縁片	(17.0)	〈5.5〉			白色粒	褐　色	
	12	土師器甕	底部片		〈2.8〉	12.0		雲　母	橙褐色	常総型
	13	土師器甕	口～胴片	(18.8)	〈10.9〉			雲　母	赤褐色	
	14	土師器甕	2/3	(8.9)	〈8.75〉			白色粒	暗褐色	
	15	土師器甕	底　部		〈3.5〉	(11.8)		白色粒	暗褐色	ロクロ成形
	16	須恵器甕	口縁1/5	(28.0)	〈7.7〉			白色粒	肺褐色	
	17	灰釉陶器椀	底　部		〈2.3〉	6.8		緻　密		K－90
	18	瓦　　片	平　瓦	長7.4	幅10.3	厚2.8			灰　色	格子の叩き
耕　作　跡	19	土師器坏	1/8	(1.03)	〈3.2〉			雲　母	橙褐色	未ロクロ
	20	土師器坏	1/4	(13.0)	3.9	(8.4)		白色粒	褐　色	
グリッド	21	土師器高坏	坏　部					白色粒	褐　色	外面赤彩
一括	22	土師器高坏	坏　部					雲　母	褐　色	
	23	土師器高坏	坏　部					雲　母	橙褐色	
	24	土師器坏	1/2	(15.0)	4.8			白色粒	内外赤彩	未ロクロ
	25	土師器坏	1/8	(13.6)	〈3.2〉			雲　母	暗褐色	未ロクロ
	26	土師器高坏	脚　部		〈7.0〉			白色粒	赤褐色	
	27	土師器高坏	脚　部		〈7.5〉			白色粒	橙褐色	
	28	土師器甕	口～胴片	(18.8)	(7.0)			砂　粒	暗赤褐色	
	29	土師器甕	底部片		〈2.5〉	(7.6)		赤色粒	赤褐色	木葉痕
	30	土師器甕	口～胴片	(22.8)	〈7.3〉			白色粒	暗橙褐色	
	31	土師器甕	口～胴片	(17.4)	〈3.8〉			小　石	暗灰褐色	
	32	土師器甕	口～胴片	(22.0)	〈3.7〉			白色粒	橙褐色	
	33	須恵器甕	口～胴片	(28.0)	〈8.4〉			白色粒	褐　色	
	34	須恵器甕	口縁片	(13.0)	〈5.7〉			白色粒	暗灰色	
	35	土師器坏	1/6	(12.0)	〈4.5〉			赤色粒	橙褐色	
	36	土師器坏	1/6	(13.0)	〈5.0〉			白色粒	褐　色	
	37	土師器坏	1/3	(14.2)	5.9			砂　粒	褐　色	黒色処理
	38	須恵器坏	1/2	(12.3)	4.2	6.0		石　英	暗灰褐色	回転糸切り
	39	須恵器高台盤	1/5		〈2.2〉			石　英	暗灰褐色	高台部欠損
	40	灰釉陶器椀	1/5		〈2.2〉	(5.8)		緻　密	暗灰色	内外施釉
	41	灰釉陶器椀	1/8		〈2.0〉	(7.4)		緻　密	灰　色	内施釉
	42	緑釉陶器片	小　片					緻　密	灰　色	内外施釉
M-001	43	土師器甕	口～胴片	1/8	(13.2)	〈4.3〉		雲　母	暗褐色	
	44	土師器甕	口～胴片	1/8	(19.2)	〈4.4〉		白色粒	褐　色	内外紐積痕
	45	土師器高坏	脚　部		〈5.5〉			雲　母	褐　色	
	46	木　製　腕	口縁欠損		〈3.5〉					内外漆塗り
流木－1	47	木　　片		長18.6	幅4.9	厚1.9	重49.4			先端焼けている
グリッド	48	木製羽口	破　片	長46.0	幅39.1	厚16.0	重26.9			
地山整形跡	49	椀　型　滓		長100.0	幅100.0	厚45.1	重330.2			
	50	炉　　壁		長76.0	幅56.0	厚55.0	重124.7			

縄文土器

縄文土器は、前期から晩期のものが出土している。点数的には後期後半から晩期にかけてのものが多く、小片を含め総数129点出土した。以下、図化できたものを時期別に説明する。

前期（第10図51～53）

いずれも半載竹管により平行沈線、押引きの平行沈線を施文するもので、51は地文にまばらな撚糸文を施文する。51・52は口縁部を残し、大きく外反する。52は口唇項部を丸い工具で刻んでいる。浮島１式に比定される。

中期（第10図54～59）

いずれも加曽利Ｅ式土器の胴部破片である。懸垂文は、沈線で区画された磨消帯となり、54の破片を見る限り間隔は狭い。地文の縄文は原体Ｒ{上を縦に施文する。

後期（第10図60～73）

60～66は称名寺式土器である。このうち、60～64は意匠区内に縄文を施文している。原体は比較的に細くＬ{R/Rである。65・66は列点文を施文している。

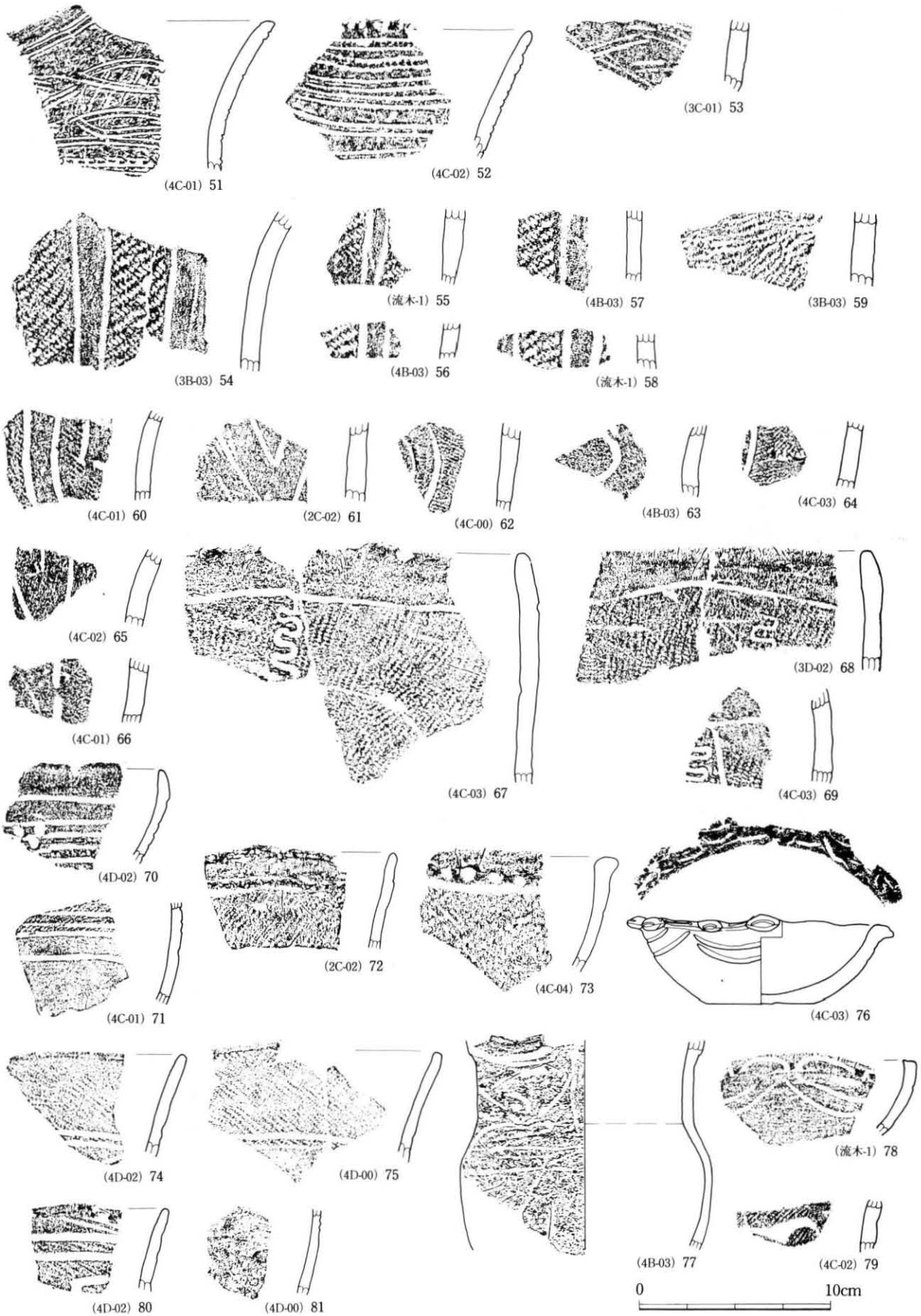
67～69は堀之内Ⅰ式土器であり、いずれも同一個体の破片である。67・68は口縁部を残し、69も口唇部を欠損するが、全体で何単位であるかは復元できない。口縁部は沈線で区画した無文帯を廻らせ、胴部には蕨手状のモチーフを垂下させている。地文となる縄文は原体Ｌ{R/Rである。器形は深鉢形を呈するが、口縁部は僅かに内湾し、綱取Ⅰ式の影響を伺うことができる。

70～73は加曽利Ｂ式土器である。70は口縁部の破片で、口縁部が折れ曲がって内項する。70・71とも平行な沈線を数条廻らせ、縄文帯と磨消帯を構成している。70は器面が荒れているが、71は内外面とも丁寧に磨かれている。72・73は口縁部に紐状隆帯を廻らすものである。72は口縁部に無文帯を廻らせ、現存部分で緩い山形を呈する。紐状隆帯は細く、項部を僅かに刻むようであるが、明瞭ではない。胴部は原体Ｒ{上の縄文で覆われ、内面は横方向に磨いている。73は口唇部に紐状隆帯を廻られせている。口縁部は僅かに内弯し、胴部は原体Ｒ{上の粗い縄文で覆われている。

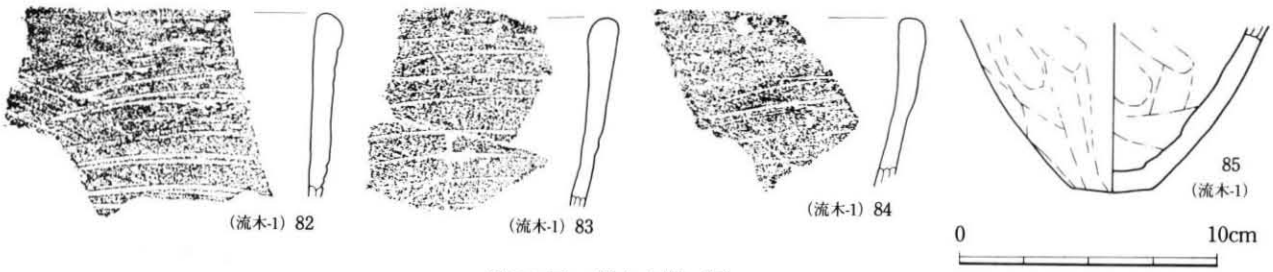
晩期（第10・11図74～85）

74・75は同一個体の破片である。口縁部に沈線で区画した縄文帯が廻り、その下にやはり沈線で区画した磨消の文様が展開する。76はほぼ完形の浅鉢形土器である。内面には植物の繊維が張り付いたように密着していた。口唇部を肥厚させ、２つの突起部を一対として６単位、計12ヶ所で突起状になる。口唇部の突起部を中心に弧状の沈線が施文されている。胴部も６単位の弧状の沈線が描かれるが、口唇部の突起の位置とは一致していない。77は全体の1/3ほどが遺存している。口縁部は６単位で山形の波状を呈し、口縁部の文様は波頂部を中心に展開している。胴部下半は丸みを帯び、無文である。78も同様のもので、姥山Ⅲ式である。79は彫刻のような沈線で入組文を描いている。81は比較的に小さな竹管状の工具により刺突している。これらのものは晩期終末のものと思われる。

82～84は「粗製土器」である。器面は非常に粗く条線で覆われている。口唇部はいずれも肥厚し、僅かに内弯している。85は底部から胴部下位の破片である。底径は３cm前後で小さく、現存する範囲には施文は見られない。姥山Ⅱ式から姥山Ⅲ式に伴う粗製土器であろう。


(4C-01) 51
(4C-02) 52
(3C-01) 53
(3B-03) 54
(流木-1) 55
(4B-03) 56
(4B-03) 57
(流木-1) 58
(3B-03) 59
(4C-01) 60
(2C-02) 61
(4C-00) 62
(4B-03) 63
(4C-03) 64
(4C-02) 65
(4C-01) 66
(4C-03) 67
(3D-02) 68
(4C-03) 69
(4D-02) 70
(4C-01) 71
(2C-02) 72
(4C-04) 73
(4C-03) 76
(4D-02) 74
(4D-00) 75
(流木-1) 78
(4B-03) 77
(4C-02) 79
(4D-02) 80
(4D-00) 81
0
10cm

第10図　縄文土器（1）

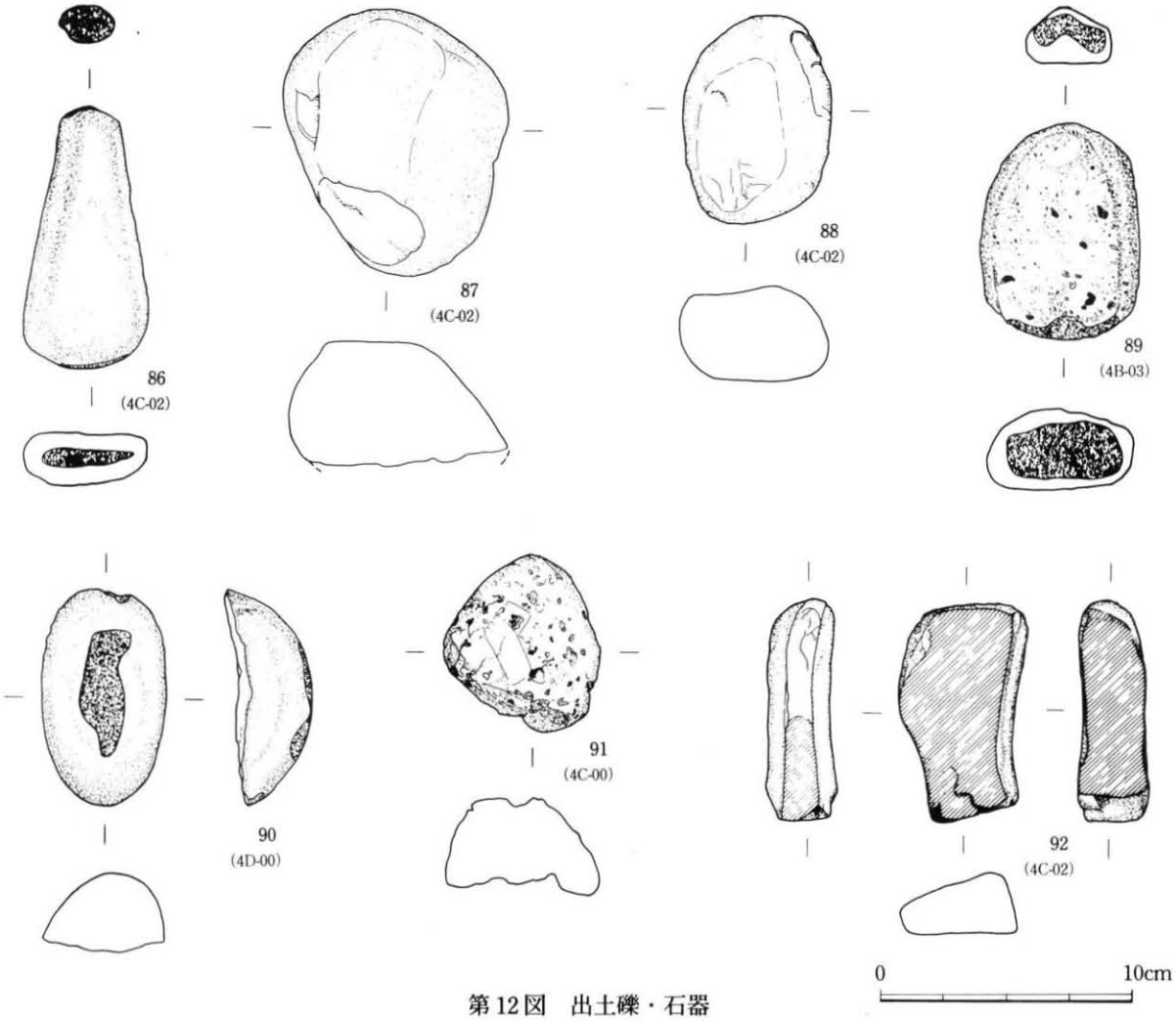


第11図　縄文土器（2）

礫石器（第12図　図版５）

86は地山整形跡から出土し、その他はすべてグリッド出土である。

86は石材が砂岩で、原礫の長軸両端部に敲打痕が認められハンマーとして使用されたものと思われる。また平面部にも若干の使用痕が認められる。87は赤化石で石材は流紋岩である。一部平坦面には加撃による窪みが認められ、台石として使用された可能性もある。また、剥離部は人為的なものか偶然的なものかは判然としない。88は礫で石材はホルンフェルスである。一部敲打痕らしきものが見られるが人為的なものかははっきりしない。89は流紋岩が石材で長軸両端に敲打痕が認められる。磨石の一種であろう。90は磨石で側縁部に摩擦痕が認められる。石材は砂岩である。91は軽石で流紋岩である。全体的に摩擦痕が認められる。92は粘板岩の砥石である。３面に使用痕が認められ、長軸の両端部は敲打痕が認められる。



第12図　出土礫・石器

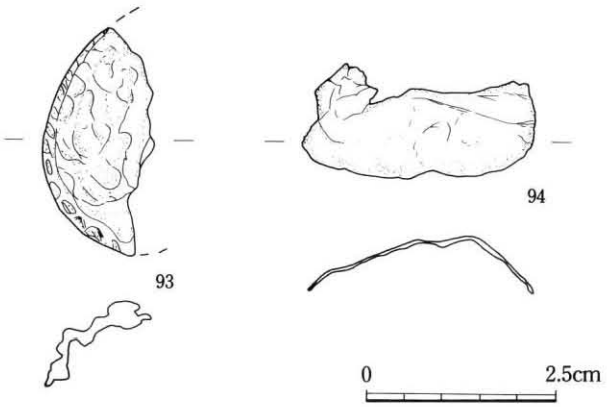
第2表　石器属性表

挿図番号	遺物番号	器　種	石　質	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重　量 g	備　　考
86	地山整形－15	ハンマー	砂　岩	105.0	50.0	21.0	148.1	両　刃
87	4 C－02－1	礫	流紋岩	105.0	90.0	49.0	505.2	台石か
88	4 C－02－1	礫	ホルンフェルス	85.0	59.0	38.0	311.8	敲打痕
89	4 B－03－1	敲　石	流紋岩	87.0	64.0	38.0	272.6	両側に敲打痕
90	4 D－00－1	磨　石	砂　岩	85.0	50.0	31.0	166.3	
91	4 C－00－1	軽　石	流紋岩	70.0	63.0	33.0	32.3	
92	4 C－02－1	砥　石	粘板岩	86.0	46.0	29.0	159.6	3方向に使用痕
	4 C－02－1	破砕礫	石　英	61.0	37.1	35.0	124.1	赤化
	4 C－03－1	破砕礫	流紋岩	30.0	51.0	20.0	36.0	赤化
	4 C－02－1	破砕礫	流紋岩	55.0	48.2	34.0	144.7	赤化
	流木－2	破砕礫	流紋岩	57.0	58.0	26.0	114.7	赤化

また、今回には掲載していないが被熱を受けた礫を4点出土した。石材は石英が1点、その他は流紋岩である。これらは一部剥離しているものや1/2ほど欠損しているものもあるが原礫である。

種子（第13図　図版5）

流木－3からは流木以外に2点の種子が出土した。93は桃の種と思われ、1/2の遺存である。遺存長30.0mm、現存幅15.0mm、厚さ0.5～3.5mm、重量0.4gである。94は何の種子か不明。遺存長30.5mm、幅9.0mm、厚さ0.5～1.0mm、重量0.6gである。今回の整理期間では時間的な余裕はないため、あらためて分析の機会を設け、何らかの方法で分析の結果を報告したいと思う。



第13図　種子（流木－3）

第３章　まとめ

今回の調査は、当センターではほとんど経験したことのない河川低位段丘上を対象にした本調査であった。したがって、調査によって明確に遺構を把握できるものなのかという一抹の不安を持ちながらの調査であった。調査の結果、当初の予想をはるかに上まわる湧き水の水量の多さやその対策に非常に手間を有したものの、遺構では水田と思われる耕作跡の範囲やそれに伴うと考えられる地山整形跡、また高谷川の縄文期における氾濫跡などの成果を確認することができた。さらに遺物も予想を反して多量に出土した。

以下、ここで得られた成果を概略しまとめとしたい。

河川氾濫跡

河川氾濫跡の範囲については今回の調査では明確に掴めていないが、いくつかのサブトレンチによりおおよその範囲として耕作跡と地山整形跡の中間付近までであると想定している。また流木は小片を含め99点出土した。これらのものは針葉樹や雑木のものが多いと考えられる。流木－３には種子が２点ほど確認され、流木とほぼ同レベルでの出土であった。また、溝の南側壁面境の縄文包含層からは、口唇部に突起部が２対一組となり、６単位で見られる浅鉢型土器（76）が出土し、山武姥山Ⅲ式と思われるものや流木－１からも浅鉢型土器（78）が出土、さらに該期の粗製土器片も見られた。76の浅鉢には内面に植物繊維が密着して確認された。この繊維は円心力によって偶然的に巻き付かれたように浅鉢の内面の形状である椀状を呈するが、分析などは実施していないため明確ではないが、恐らく上流から流れてきた段階に湿地帯に植生する植物に絡みつき本遺跡にたどり着いたものであろう。強いて挙げればこの植物はイネ科の多年草である真菰とも思われる。

耕作跡（水田）

耕作跡は調査区の西側で確認されたが、範囲的には調査区外、西方向に延びているものと考えられる。規模は確認した範囲で11.7×11.3ｍで区画については不明確である。これは畦畔や水路などの施設が確認されなかったことと、現代まで継続して水田としての機能をしていたことが起因する。さらに確認面から10～20cm上面には木片が散見された。これは渡し木と言われるもので、泥炭層特有の深く潜んでしまう場所に、板状の木や径の小さな丸太などを敷いて、作業に支障しないような工夫がとられていた。この渡し木は現代においても行われているものであり、調査中に出土した渡し木も現代のものであった。したがって、耕作跡の上面は現代までの水田耕作により破壊されている可能性は極めて高い。出土遺物では耕作跡の確認した面で19・20（第８図）の土師器坏を出土した。これらの坏は器形の特徴から８Ｃ中から後半頃に想定されるものであり、この耕作跡はこの頃には営まれていたことが推側される。

地山整形跡

調査区の南側に確認された溝状になった形態を呈するが、このプランは河川と平行して整形されていた。出土遺物は古墳時代後期から平安時代までの遺物が出土した。底面からは主に奈良・平安時代の土器が多く見られ、覆土上位面に古墳時代の土器が多く出土した。しかし、斜面部特有の堆積状況のため、古墳時代の土器も幾つかは底面から出土し、逆転現象は見られる。また、ピット（Ｐ－１）が検出され、覆土には杭状の木が直立して確認された。検出状況から推測すると恐らく台地部からの崩落土などを防御する塀などを設けた防災施設の杭である可能性が考えられる。しかし、１基のみであるため推定の域をでない。

溝

溝は東西方向に延びているが、近世頃の木製の椀が底面から確認され、近世の溝として捉えられるであろう。ま

た、水田の用水路的な用途である可能性が考えられるが、今回の調査範囲では不明確である。

以上にように、各遺構ごとに概略を述べたが本遺跡は水田として捉えらるであろうかが一番のネックとなる。耕作跡の断面を観察すると起伏に富んだ層が青灰色を呈しグライ化し、この層が鋤床であると考えられ、土壌が泥炭層であることは保水性に富んでいることから、稲作栽培での最条件であると思われる。また、調査中も予想をはるかに上まわる湧き水や台地からの搾れ水があり、水の供給は充分であった可能性は考えられる。調査中は水中ポンプを24時間稼動しておかなければ調査を中断しなければならない悪条件であったことと、2時間程水中ポンプを停止すると、たちまち水が増し耕作跡の範囲は冠水する程であった。これらの状況からみて稲作栽培には適していた可能性は十分考えられる。また、条里制を採用するにはそれらの区画を設定できるだけの広大な面積が必要であるが、本遺跡地では台地の谷津部であり、その中央部には河川が流れ、比較的に狭い谷津田であることから適していなかったのではないだろうか。そのため古墳時代以来の小区画的な水田を採用していたものと想起される。しかしながら弥生時代以降小区画の水田が古代まで連綿と続いて耕作されていることは群馬県の大八木遺跡（古代の水田）や日高遺跡（弥生時代・古代の水田）が既に過去の調査で周知されているところであるが、また一方で静岡県の登呂遺跡のように広大な面積に畦や水路などが発見され、全国的には福岡県の板付遺跡を代表として様々な形態の水田跡が確認されている。こうした中、千葉県においても水田調査は比較的に歴史は浅いが、市原市条里制遺跡や君津市郡条里制遺跡などの大規模な水田跡が調査され、地割りが現在まで遺存していたことが判明している。特に代表的な市原条里制遺跡では弥生時代から近・現代までの水田の変遷が解明され、中・近世の坪内地割りが長地型であることが判明している。近年では太平洋側の鴨川市の東条地区遺跡群の条里制水田遺跡が調査され、畦畔と水路を確認し成果を上げている。しかし、本遺跡が所在する北東部では現在までは水田調査がほとんど実施されなかった地域である。その原因は様々であるが特に地形的に広大な平野部（低地）と大規模な灌漑用水用の河川の存在がないことに起因するのではないだろうか。つまり、小河川とその流域の比較的小範囲での低地に委ねなければならない地形的な制約が当地域ではあっただろうし、また弥生時代から現代に至るまで連綿と当地域での稲作栽培が行われていたとの見解による調査の対象とならなかったことが現在に至っている。

本遺跡での今回の調査事例は、低地遺跡での生産遺跡として再認識と今後の遺跡の取り扱いに一石を投じた形となった。今後はこのような調査事例は徐々にではあるが増加するものと思われ、資料の蓄積によって本遺跡の新たな知見が見いだされるであろう。

参考文献

（1）清水潤三　1954　「九十九里沿岸の於ける低地遺跡の研究（予報）」『史学』第27巻・4号

（2）清水潤三　1963　「千葉県横芝町谷台出土」『考古学雑誌』第48巻・3号

（3）1975　『横芝町史』横芝町史編纂委員会

（4）西山太郎　1980　「低地遺跡研究の覚書ー特に九十九里を例として」『史館』12号

（5）1986　『千葉県埋蔵文化財分布地図（2）』（財）千葉県文化財センター

（6）小久貫隆史 1988　『八日市場市平木遺跡』（財）千葉県文化財センター

（7）蔀　淳一 1989　『横芝町山武姥山貝塚確認調査報告書』（財）千葉県文化財センター

（8）1993　『歴史時代（1）』房総考古学ライブラリー（財）千葉県文化財センター

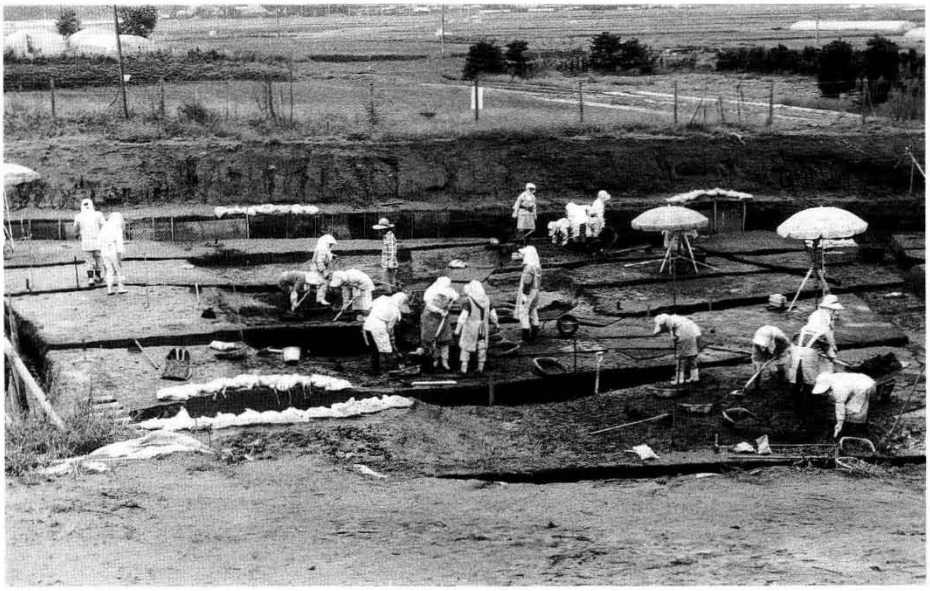
（9）大谷弘幸　1993　「茂原街道に隣接した溝跡について」『研究連絡誌』（財）千葉県文化財センター

（10）大谷弘幸　1996　「資料編　考古3」『千葉県の歴史』県史シリーズ11（財）千葉県史料研究財団

写　真　図　版

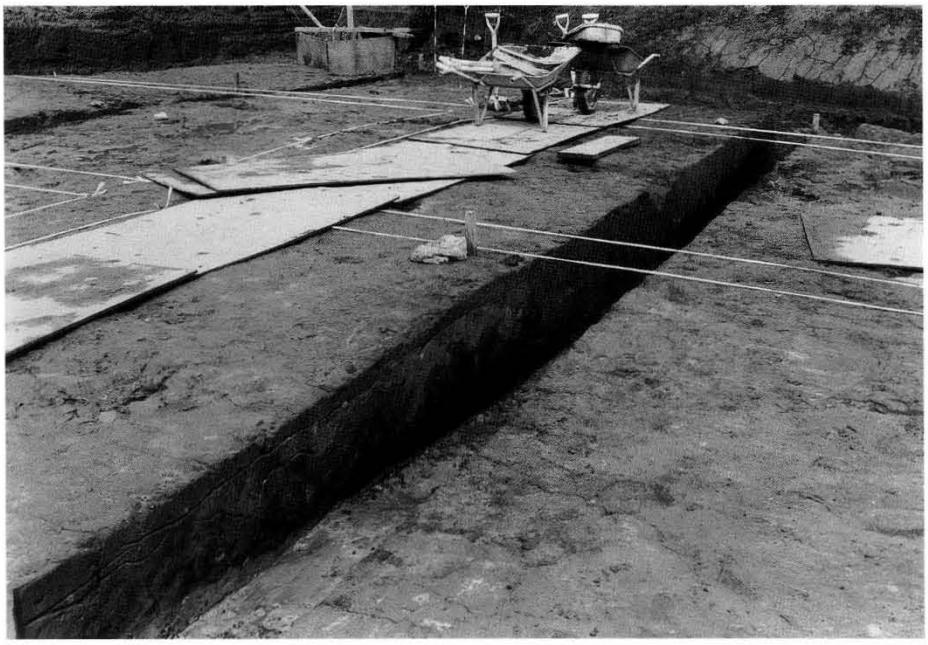
1．遠景
高谷川から望む

2．調査区全景

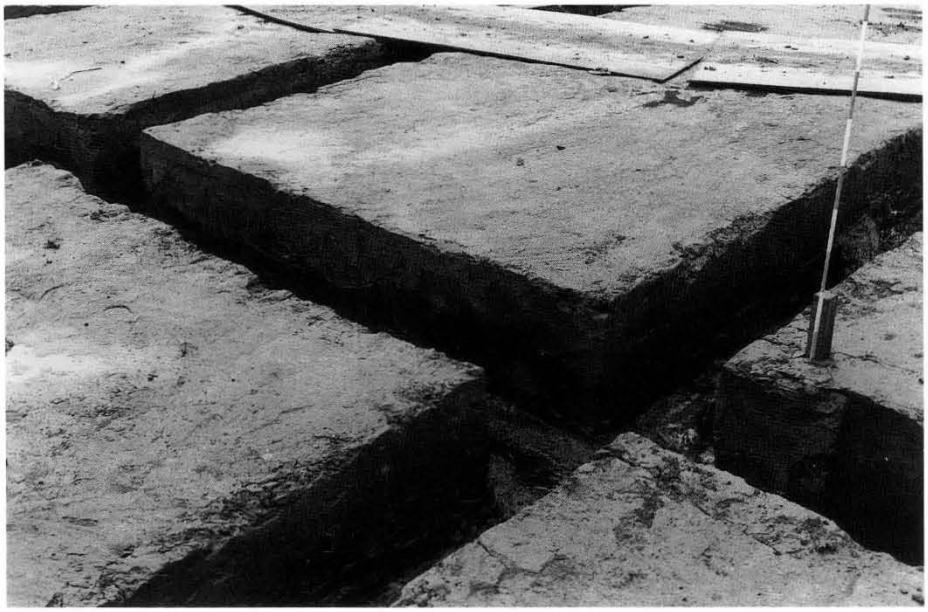


3．調査風景

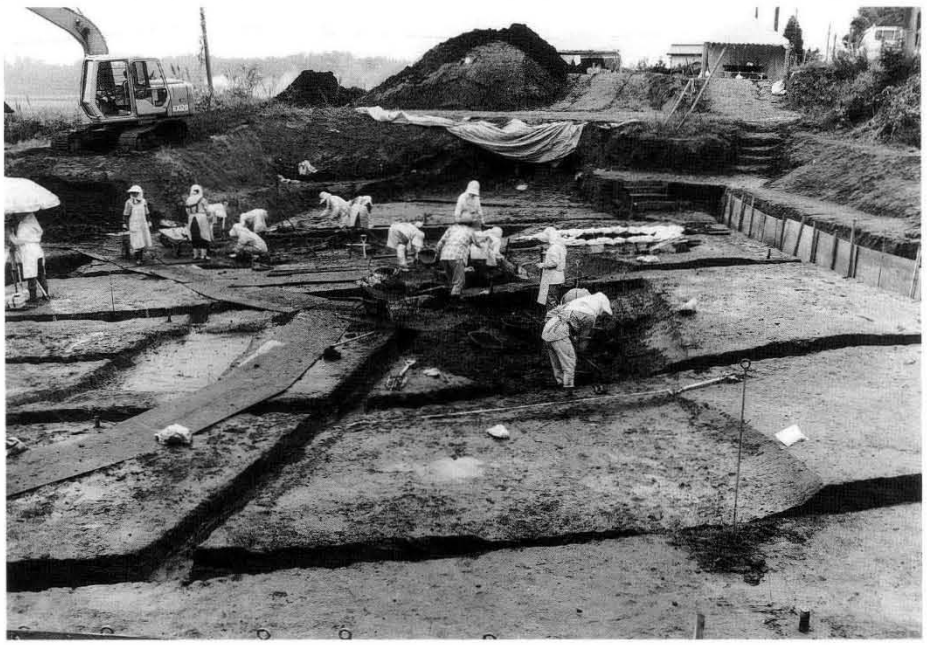
図版 2



1．耕作跡断面
　3トレンチ



2．耕作跡断面
　7トレンチ



3．地山整形跡

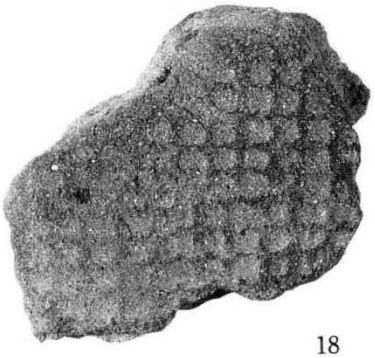
1．溝（M－001）

2．流木－1

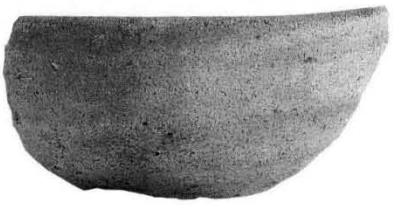
3．NO.76 出土状況
（内側植物繊維）

1

25



18



2

26

47

3

27

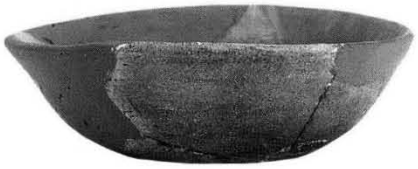
10

14

37

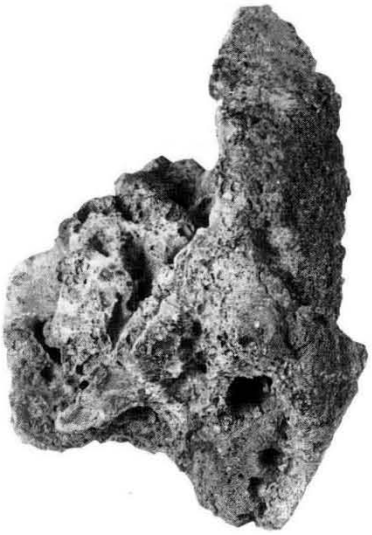
49

24



38

出土遺物（1）



50

76

94

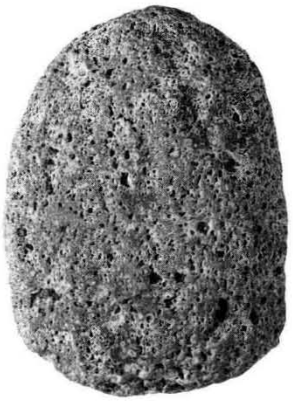
植物（表）

86

46

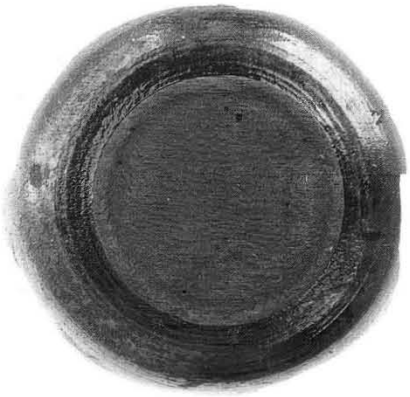
植物（裏）

内面



89

85



底面

93

91

出土遺物（2）

報告書抄録

ふりがな	かみたきのしたいせき
書　　名	上滝ノ下遺跡
シリーズ名	財団法人山武郡市文化財センター　第58集
編著書名	平山　誠一
編集機関	財団法人　山武郡市文化財センター
所　在　地	〒299-3242　千葉県山武郡大網白里町金谷郷1356-2　TEL0475-72-3211
発行年月日	西暦　1999年３月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード		北　経 °′″	東　経 °′″	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
上滝ノ下遺跡 （かみきたのした）	山武郡横芝町木戸台 （さんぶぐんよこしばまちきどだい） 字上滝ノ下1166-1他 （あざかみたきのした）	12408	山文セー 131	35度 41分 7秒	140度 27分 43秒	19980817 ～ 19981007	汚水処理 施設建設 事業

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
上滝ノ下遺跡	包蔵地	縄文～近世	耕作跡　１ヶ所 地山整形跡　１ヶ所 溝　１条	縄文土器 土師器、須恵器 木製品（椀）	河川の氾濫跡 及び耕作跡

上滝ノ下遺跡

印　　刷　平成11年３月20日
発　　行　平成11年３月30日
編　　集　財団法人　山武郡市文化財センター
千葉県山武郡大網白里町金谷郷1356－2
ＴＥＬ　0475－72－3211

発　　行　千　葉　県　横　芝　町
印刷・製本　株式会社　エリート印刷
千葉県千葉市中央区市場町６－８
クリスタルいのはな023号
ＴＥＬ043-225-5881

SCRC ARCHAEOLOGICAL PAPERS NO.58

KAMITAKINOSITA

1 9 9 9
CHIBA PREFECTURE YOKOSHIBA TOWN OFFICE
SANBU CULTURAL PROPERTIES RESEARCH CENTER